

「子ども計画」策定、「子どもの権利条例」制定のための
意見交換会
実施結果報告書（意見一覧）

令和8（2026）年1月

目次

意見交換会概要	1
市内の不登校に関する支援団体等のみなさんとの意見交換会	3
(1) 保護者の抱える不安や悩みについて.....	3
(2) 今後、必要と考えられる支援策について.....	7
(3) 子どもの権利条例について.....	9
子育て中の保護者のみなさんとの意見交換会	11
(1) 江別市での子育て、こうなればもっと良いのに.....	11
(2) お子さんが毎日楽しく、安心して過ごすために大切にしていること.....	15
若者の支援機関のみなさんとの意見交換会	17
(1) 若者にとって必要な居場所とは.....	17
(2) 子どもにとって大切な権利は何か、それを守るためには、どのようなことが必要か....	23
江別介護ママの会のみなさんとの意見交換会	24
(1) 子どもが健やかに成長するために必要なこと.....	24
(2) 子どもにとって大切な権利はなにか、それを守るためには、どのようなことが必要か	27
子どもの居場所づくり実践者のみなさんとの意見交換会	29
(1) 子ども食堂の役割と今後の課題.....	29
(2) 子どもにとって大切な権利はなにか、それを守るためには、どのようなことが必要か	33
北海道中央児童相談所のみなさんとの意見交換会	36
(1) 子どもの権利擁護について.....	36
(2) 子どもの権利を守るために必要な機能や支援について.....	38
北海道南幌擁護学校高等部のみなさんとの意見交換会	39
(1) 江別市のここが好き.....	39
(2) どうしたら江別市がもっと住みやすいまちになるか.....	40
(3) みんなが望む卒業後の未来ってどんなもの?.....	41
(4) 学校生活をもっと楽しく安心できる場所にするには.....	41
(5) みんなの「やりたい」を教えて.....	41

意見交換会概要

1 不登校児童生徒の支援団体等のみなさんとの意見交換会

開催日時：令和7年8月28日（木）午後4時～

開催場所：教育支援センター「ねくすと」

参加者：市内の不登校に関する支援団体 7名

議題：（1）保護者の抱える不安や悩みについて
（2）今後、必要と考えられる支援策について
（3）子どもの権利条例について

2 子育て中の保護者のみなさんとの意見交換会

開催日時：令和7年9月2日（木）午前10時15分～

開催場所：子育て支援センターすくすく

参加者：子育て中の保護者（子育て支援センターすくすくの利用者） 6名

議題：（1）江別市での子育て、こうなればもっと良いのに
（2）お子さんが毎日楽しく、安心して過ごすために大切にしていること

3 若者の支援機関のみなさんとの意見交換会

開催日時：令和7年9月17日（水）午前10時～

開催場所：総合社会福祉センター

参加者：くらしサポートえべつ、江別・岩見沢若者サポートステーション、
さっぽろ若者サポートステーションの相談員 4名

議題：（1）若者にとって必要な居場所とは
（2）子どもにとって大切だと思う権利は何か
それが守られるためには、どのようなことが必要か

4 江別介護ママの会のみなさんとの意見交換会

開催日時：令和7年9月18日（木）午前0時～

開催場所：総合社会福祉センター

参加者：江別介護ママの会 4名

議題：（1）子どもが健やかに成長するために必要なこと
（2）子どもにとって大切な権利はなにか
それを守るためには、どのようなことが必要か

5 子どもの居場所づくりの実践者のみなさんとの意見交換会

開催日時：令和7年9月29日（月）午後1時30分～

開催場所：いきいきセンターさわまち

参加者：子どもの居場所づくりの実践者（NPO 法人恩おくり） 4名

議題：（1）子ども食堂の役割と今後の課題
（2）子どもにとって大切な権利はなにか
それを守るためには、どのようなことが必要か

6 北海道中央児童相談所のみなさんとの意見交換会

開催日時：令和7年10月3日（月）午後4時45分～

開催場所：江別市役所内会議室

参加者：北海道中央児童相談所職員 2名

議題：（1）子どもの権利擁護について
（2）子どもの権利を守るために必要な機能や支援について

7 北海道南幌養護学校高等部のみなさんとの意見交換会

開催日時：令和7年10月10日（金）午前10時～

開催場所：北海道南幌養護学校

参加者：北海道南幌養護学校高等部の生徒 2名

議題：（1）江別市のここが好き
（2）どうしたら江別市がもっと住みやすいまちになるか
（3）みんなが望む卒業後の未来ってどんなもの？
（4）学校生活をもっと楽しく安心できる場所にするには
（5）みんなの「やりたい」を教えて

市内の不登校に関する支援団体等のみなさんとの意見交換会

開催日時：令和7年8月28日（木）午後4時～

開催場所：教育支援センター「ねくすと」

参加者：市内の不登校に関する支援団体 7名

議題：（1）保護者の抱える不安や悩みについて
（2）今後、必要と考えられる支援策について
（3）子どもの権利条例について

（1）保護者の抱える不安や悩みについて

【放課後児童クラブ運営事業者①】

- ・保護者の方のアンケートによると「子どもには普通に学校に行ってほしい」が本音であり、昔も今も変わらない。
- ・昔と今の違いは無理に行かせようとしないうところ、親の考え方が変わってきている。
- ・いじめを原因とする不登校をテーマにした番組を見たが、やはり親は悩んでいるし、朝、学校に行かせようと格闘する日々が続く、嫌になっている。
- ・子どもが学校に行かない理由として、いじめられたからとか先生が怖いからとかいろいろあるが、ほとんどの場合は理由がない。
- ・心の相談員をやっていた時、理由がなくて学校に行かないのは、ただのわがままだと思っていたが、自律神経や脳のメカニズムが関係しているということを経験も学んでいく必要がある。それは教育現場の人たちも同様。
- ・保護者は子ども以上に悩んでいるのではないかと思うので、寄り添っていきたい。
- ・保護者に聞くと、親の務めは子どもを守ることであり、最終目標は自立なので、このままでいいのかと不安を感じている。

【障がい福祉サービス提供事業者①】

- ・登校支援の中で、子どもはもちろんだが、親を支えるという意味で難しさを感じている。
- ・子どもの状況と学校との兼ね合いや関係性によって、保護者の置かれている状況や不安、悩みは個別性が高い。
- ・「学校に行こう」を一緒にやるのではなく、子どもたちの強みや保護者の不安に対応していくことが発達支援の中では大事。
- ・保護者によって、悩みや不安の時期は違ってくるので、それぞれに寄り添っていくことに難しさを感じている。
- ・利用者については、最初は小学生が多かったが、最近は小学生から中学生まで継続しているというのが増えてきている。小学5、6年生で不登校になってくるというケースも増えてきている。
- ・これまで、支援の結果、学校に戻れたケースもある。しかし、戻れたことがよかったのかという部分もある。

- ・学校に戻れたのは、SSWに入ってもらい、保護者を交えてのケース会議を繰り返す行うことで、学校に行っていない期間に保護者をどうやって支えていくのか、少しずつ行き始めたが目標はこれでいいのかをこまめに確認を行ったことによる。ただ、学校に行き始めるとケース会議が減り、連携が希薄になってくるので、学校に行けているという状況が、本当に子どもにとって、メンタルを含めて良い状況なのか、フォローや支援が大事。

【不登校児童生徒の保護者団体】

- ・不登校でも、子どもが学校に行かなくなり始めた初期段階と、長期化して数年たった時の子どもの気持ちは変化していると感じている。
- ・不登校の初期段階では、子どもの昼食や学校への送迎、連絡など、時間に追われ、精神的に追い詰められてしまい、これをきっかけに休職や退職を考える声が多い。うつ傾向になる保護者も多い。
- ・収入が減る一方で、昼食や保護者自身の通院、少しずつ元気になり始めたときにフリースクールや教材などで出費が増える傾向がある。
- ・江別市の不登校の相談窓口は教育委員会になっているが、「学校に行かない」ことがメインの話で、学校や先生、子ども同士であったことなどを学校を管轄している教育委員会に相談することは、保護者から見るとハードルが高い。
- ・フラットな気持ちで楽に話せる相談先が欲しい。
- ・不登校が長期化してくると、保護者は「学校に行かせることがゴールじゃない」という気持ちに変化する。「子どもが泣きながら学校に行かなければならないという状況より、家で安心して健やかに生活するのもいいんじゃないか」と考え、学校以外の居場所を探し始める。
- ・子どもの居場所について、一貫した情報を得られるものがない。個別の情報はあるが見つめるのが難しい。また、市内には少ないので札幌も含めて情報を探すが、フリースクールは学割の対象にならないなど、経済的な理由から通わせることに躊躇する保護者もいる。
- ・保護者は、「学校から離れた今、子どもの人生を長いスパンで見たときに今のベストは何か」を考えるので、子どもの居場所も含めて情報が欲しい。欲しいときに欲しい情報が得られない。
- ・探せばいろいろな情報は出てくるが、明確にわかりやすく説明してくれる人は誰なのかがわからない。情報がまとまっているサイトや冊子、また、適切な相談先を案内してくれる総合窓口などが欲しい。
- ・「学校に行くことがゴールじゃない」と考える保護者が、教育委員会に相談するのは方向性が違う気がする。福祉分野に窓口があると良い。
- ・江別市として、登校サポーターや心の相談員、スクールカウンセラー、SSWが拡充されていて、学校の先生との間にワンクッションあるのはとても良い。

【放課後児童クラブ運営事業者②】

- ・子どもの居場所支援をしているが、そこに来る子どもの中には学校に行くことを諦めている子もいるし、支援している場所でも合う・合わないはある。
- ・心の相談員をしていたときに見ていた子どもと支援先で再会することもある。学校にいる相談員が支援先を紹介するなどの力添えをしてくれることもある。
- ・中高生の居場所支援もやっているが、地域の中で認識されて、学校の便りや保護者間でなど、思わぬところからつながることも多い。
- ・保護者は、「この状態がいつまで続くのか」「勉強が遅れることで進学や将来に響くのではないか」という不安を抱えている。
- ・学校とのコミュニケーションにうまくいかない、朝行くのか行かないのかの繰り返しで、学校に行ったとしても対応できないことで悩んでいる保護者もいる。
- ・最初は勉強や進学、将来が不安だったが、そこから「生きていてほしい」や「笑顔でいてほしい」に変わり、「学校じゃなくてもいいんじゃないか」に行きつく保護者が多い。
- ・「明日「学校に行かない」って言うかもしれない」という気持ちで子どもと接していれば、学校に行かない子への偏見にもならないし、一緒になって考えられるのではないかと感じた。
- ・保護者への支援と子どもへの支援は、分けて考える必要があるのではないか。

【障がい福祉サービス提供事業者③】

- ・子どもが学校に行きたくない理由が分からない。子どもと学校に聞いてもかみ合わず、本当のことが分からない。
- ・先生や学校によって対応が違う。
- ・発達障がいの診断がついていれば受給者証が取れて支援を受けられるが、グレーゾーンだと、なんとなく幼少期を過ごして普通級に入ってみて、勉強についていけない状況になり、十分な支援を受けられないことがある。
- ・周りと同様に学習が進まないことで「行きたくない」につながることもある。
- ・原因が分かっているならば、転籍や転校で解決することもある。理由がないのは対応が難しい。

【障がい福祉サービス提供事業者④】

- ・保護者の悩みで多いのは、学校に行けていないことが周りとは違うということ。
- ・子どもの将来が不安で焦りが出てしまい、それが子どもに伝わって子どもがどんどんふさぎ込んでしまうケースが多い。
- ・子どもが学校に行こうとすると保護者はすごく頑張るが、やっぱり行けないとなるとその前よりも落ち込んでしまう。どうしたらその気持ちを支えられるのか答えは見い出せない。
- ・悩んでいる保護者は自分ができていることが見えにくくなっているようで、認めてあげるように伝えている。
- ・自分らしく人と関わり続けられて気軽に行ける場所があると安心だが、1つつながりができても次につながるエネルギーが保護者も子どももなかなかない。

- ・学校に欠席の連絡をするのもストレスになっている人もいる。
- ・市公式LINEのようなSNSで、それぞれの施設の環境や魅力などを情報発信できないか。市の広報で、いつどこで支援している・遊べる・学習できるということを知らせることが大事。
- ・合う・合わないがあるので、居場所の選択肢があるほうが良い。

(2) 今後、必要と考えられる支援策について

【放課後児童クラブ運営事業者②】

- ・世田谷のプレーパークのような自由に遊べる子どもの居場所づくりに取り組んでいる。遊び場づくりといっても公園の遊具を整備するものではなく、プレーリーダーと呼ばれる大人の管理者が1人いて、いつでも来られる、保護者がついて回らなくても子どもが遊べて、親同士でコミュニケーションが取れるような場所。
- ・放課後に遊べる友達がいない子どもが約18%いるようだ。習い事や家庭の事情などで自由に遊べる時間・場所が少ないので、遊び場を整えてあげることが大事。
- ・プレーパークは、家に親がいない時間などに自由に行ける遊び場であり、大人がいて遊びを促しながら、昼食の状況などで貧困層のチェックもできる。
- ・「江別市子どもが主役のまち宣言」をしているまちとして、遊具などの公園整備にお金をかけるのであれば、居場所を求めている子どもたちを拾い上げるようなまちづくりをしたほうが良い。
- ・中高生の支援として「みんなの自習室」を始めたときに、「不登校だけ行って勉強してもいいか」などの問い合わせがあり、違う目的で始めた支援が不登校の支援にもつながったこともある。特化したものも必要だが、「誰でもいいよ」ということにポイントがあるのではないかな。
- ・麻の実児童センターなどはお昼に1度帰宅させられるが非現実的。昼もやるのであれば、家に帰らない子どもを拾い上げる場所になるのでは。また、午後5時で終了になっているが、中高生は午後5時～9時くらいが最も利用したい時間帯。新しい施設を作らなくても、延長できれば中高生の居場所になる。
- ・施設に入るのにハードルが高い場所もある。
- ・えぼあホールなどの当日空いている部屋を提供するなど、お金をかけなくても支援できる場所はいっぱいあると思う。
- ・学校に行っていないなくても居場所はあるというメッセージと同時に、学校に行っていないも行っていないなくても誰でもどうぞというメッセージも必要。

【障がい福祉サービス提供事業者③】

- ・不登校になって初めて知ったことが多い。リモート授業やSSWの存在、出席扱いになる条件など。あらかじめ知っていたら、不登校になったときにスムーズなのではないかな。
- ・テストを受けていないという理由で真っ白な通知表が戻ってきてショックを受けた保護者がいた。単位や成績表などがどうなっているのかわからず、高校に行けないのではと心配していた。事前に知っていたら準備ができていたかもしれない。

【不登校児童生徒の保護者】

- ・学校側は登校してほしいので、今の時点で必要な情報は提示してくれるが、結局決めるのは学校で、子どもと保護者が望む形の選択ができない。例えば、SSWや相談員など、がどういう人がいて、どの人に相談すればいいのかを選べると良い。
- ・別室登校やタブレットを持ち帰って家で学習するという選択肢もあるのに、言われていないので知らなかった。最初からそれを選択できていれば、学習できない期間

がなくなるのでは。

- ・不登校になって初めて提示されるのではなく、学校や教育委員会でこういう選択肢もあるということをお知らせしてほしい。その中から必要になった人が必要なものを選ぶ。子どもにとっては生きる道を自分で選ぶことにつながる。
- ・良いサービスがたくさんあって、リモート学習ができる環境も整っているのに、提示されず2年経った時に「こんなことやってたんだ」「これができていたら何か将来違っていたかもしれない」という思いを抱くことがあった。

【放課後児童クラブ運営事業者①】

- ・ねくすと以外の支援している事業所に通所した時も、学校と連携して出席扱いにしてほしい。
- ・夏休みに、自己肯定感を高める「CAP（キャップ）」を1～6年生、保護者、職員が体験した。「自分という1人の人間はかけがえのない1人である」ということを1人1人が学ぶことによって、自己肯定感が高くなり、不登校の問題の解決にもつながるのではないかと感じた。恵庭市や石狩市でも学校のカリキュラムの中で行われていて、「江別市子どもが主役のまち宣言」からの子どもの権利条例制定に向けて、江別市でもやってほしい。

【放課後児童クラブ運営事業者②】

- ・支援する側として、自分たちの立ち位置や地域で起こったこと、自分たちがやることはわかっているが、ほかの事業所がどのような支援をしているのかわからない。今ここで話してわかったこともある。
- ・ねくすとが合わなくて来た子どももいるが、その後、行けるようになる子どももいるので、支援する側同士がお互いの特長を知って連携できれば保護者のストレスも減るのでは。

【障がい福祉サービス提供事業者④】

- ・不登校の子どもは、外で活動ができて「今日も頑張れた」と思えることを積み重ね、笑顔で家に帰ることは保護者の安心にもつながる。そのように過ごせる居場所を増やすためには、不登校を理解してくれる大人が必要。

(3) 子どもの権利条例について

【放課後児童クラブ運営事業者①】

- ・子どものことを考える上で、教育委員会と子育て支援課が一丸となって考えてくべき。
- ・子どもの権利については、子どもが知るよりも先に大人が知っておかないといけないことなのではないか。大人が学習できる機会があると良い。

【放課後児童クラブ運営事業者②】

- ・不登校の子どもたちにメッセージを出すなら、具体的な内容でないと意味がない。義務教育にしても、義務があるのは保護者や大人であり、子ども自身が学校に行く義務ではなく、選ぶ権利は自分にあると言ってあげてほしい。
- ・立派な条例を作るだけではなく、市民レベルで理解度を上げていかないと子どもにメッセージは届かない。作る過程が大事。
- ・いろいろな状況の子どもたちの声を吸い上げて、学校に行く人、行かない人、家や学校以外の場所、フリースクール、フリースペース、それぞれの状況に応じた具体的なメッセージを出すことが大切。

【子育て支援課】

- ・条例なので、最初は前文という形で条例に込めた思いを記載するが、メッセージ性のある言葉ではなく、かたい文章になる可能性もある。一方で、今いろいろ聞いて、かみ砕いて伝えるということは重要だと感じている。
- ・子どもは生まれながらにして自分らしく生きる権利がある。子どもたちに伝わるような仕組みを整えなければならない。

【放課後児童クラブ運営事業者②】

- ・実際に子どもたちの意見を吸い上げるような部署など、実効性のあるものがないと権利宣言だけで終わってしまうのではないか。札幌市は、救済措置として困ったときはLINEでSOSを出せたりする。やっていることが見えることも必要。

【子育て支援課】

- ・子どもの声を聞く仕組みも整えなければならないし、ワークショップをやる中で学校の先生に話を聞くと、話を聞くだけで終わりにしないでほしいとのこと。「子どもたちが、自分たちの意見が社会や地域を変えたと実感をすれば、それが力になってもっと頑張ろうという気持ちになれる」と言っていた。
- ・現在、子どもたちとワークショップをしながら公園づくりを進めている。子どもの声を聞いて、それがかたちになることが重要と考えている。
- ・どのような仕組みになるかはこれからの検討になるが、子どもの声を聞くことを意識しながら運用を考えていかなければならない。

【不登校児童生徒の保護者】

- ・選ぶ権利、発信する権利、言いたいことを聞いてもらえる権利、自由に相談できる権利などにより、子ども自身が勇気を出して動いた結果を感じられる、やってよかったと思えることを繰り返して成長していく。守られる権利や教育を受ける権利ももちろん大事だが、子どもたちが選択することに協力してくれる大人に伝えられる道しるべがあると良い。

【子育て支援課】

- ・子どもたちにどうやって条例を浸透させるかについては、まだ検討できていない。条例を作っただけで、簡単に子どもたちの考えや気持ちが変わるとは思っておらず、広く子どもたちに知ってもらい、大人たちにも知ってもらうことが重要だと考える。いろいろな人に知ってもらえる機会を作ることも重要な課題と認識している。

【不登校児童生徒の保護者】

- ・今回の意見交換会にあたって保護者に話を聞いたが、保護者の支援も嬉しいが、保護者は子どもが笑顔で元気で幸せだったらそれが一番良いと感じている。まずは、子どもに対する支援を的を射たものとして整えてほしい。権利条約は、子どもたちに権利が与えられ、それがかなった時、保護者も自然と幸せになれるのではないか。

【子育て支援課】

- ・子どもの権利について、国と国の間で条約が結ばれたり、国においても子どもの権利を守っていくというのは共通の認識となっているが、それぞれの自治体で条例を作るということは、そのまちの中で大切に子どもの権利がどういったものなのか、地域色を出して作るということが重要であると思っている。
- ・これから権利の主体となる子どもたちにアンケートを実施するが、障がいをお持ちであったり、なかなか自分では回答ができない場合には、代わりになる保護者や支援団体から情報や意見をもらって、どんな条例にすればいいのか、子ども・子育て会議で協議していく。
- ・子ども自身が、子どもにも権利があるということを分かっていなければならないし、当然大人も分かっていなければならないということで、大人も子どもも理解し、同じ思いで共通認識を持つために作る条例である。条例を作って終わりではなく、条例に基づいて、子どもから大人まで権利を理解できるような周知の取組と、子どもの声を聞くための取組が必要であると思っている。

子育て中の保護者のみなさんとの意見交換会

開催日時：令和7年9月1日（木）午前10時15分～

開催場所：子育て支援センターすくすく

参加者：子育て中の保護者（子育て支援センターすくすくの利用者） 6名

議題：（1）江別市での子育て、こうなればもっと良いのに
（2）お子さんが毎日楽しく、安心して過ごすために大切にしていること

（1）江別市での子育て、こうなればもっと良いのに

【保護者①】

- ・上の子を出産した時に山口県萩市に住んでいて、結構お金をもらえるまちだった。田舎なので若い人が出て行ってしまうからだと思う。生まれたとき、1歳、2歳、6歳、12歳でそれぞれ10万円もらえる。第3子、第4子になると30万円とかもらえる。福岡では、長期休みの時に交通機関が協力して、普通列車限定で子どもはどこまで乗っても100円というのをやっていた。モノレールが無料の日もある。
- ・江別市に引っ越してきて、下の子を市立病院で出産したが、出産費用が高いと思った。10月からまた値上げされることに加えて、深夜加算で5万円、休日加算もかかるとホームページに書かれていた。出産できる施設の継続のためとなっているが、札幌に近いこともあり、出産する人が流れてしまうのではないかと。
- ・今住んでいる見晴台や新栄台、元江別にどんどん家が建ってきているので、保育園や幼稚園が増えてほしい。
- ・公園の遊具が新しくなっているが、小さい子は、すべり台をすべるのが難しい。南幌町のはれっぼのように小さい子用と大きい子用の遊具が分かれていると安全に遊べると思う。

【保護者②】

- ・子育てしやすいまちになるためにと考えると、真っ先にお金のことが浮かんだ。来年、娘を保育園に預けること考え始めている。保育士をしていて子どもたちを見る中で、子どもによって保護者のもとで過ごす時間が多いほうが良い、少ないほうが良い、集団にいる方が楽しいなどそれぞれだが、保育園や幼稚園で過ごす時間は充実したものになるべきだと思う。
- ・現状、家計を守るために働かなければならない人が増えて、1歳で入れたい人が増えている。私も、本来なら3歳までゆっくり家で面倒を見たいが、そうもいかない。お金の負担を少しでも減らせる支援があると気持ちが楽になるのでは。物価が上がってきているので、お金の支給やおむつの無料券をもらえると嬉しい。
- ・子どもたちが園に通いつつも、家庭で過ごす時間を大切にしたい。そのために、小さいことから制度が増えていくと、何年後かの未来が変わっていくと思う。
- ・家に子どもと2人でいて何をしようとなることが多く、札幌の子どもが遊べるカフェに行く。江別市は、子育て支援センターは充実していると思うが、土日やおいしいものを食べたいときとかに、赤ちゃんを連れて行ける飲食店がパツと思いつか

ない。子育て支援センターとは別に、子育てを頑張っている人の息抜きになる場所がほしい。

【子育て支援課】

- ・仕事をしたい人もいれば、子どもに付き添ってほしい人もいて、それぞれの考え方に沿った支援があれば良い。江別市だけでは難しさもあるが、国も同じような考え方で、いろいろな働き方や生き方をかなえられる社会を作っていこうという方向性になっている。

【保護者③】

- ・十数年江別市に住んでいて、公園や支援施設は子育てにどんどん優しく、子育てしやすくなってきている。
- ・やっぱりお金の支援が必要。江別に住むことは、子どもじゃなくて親が決めること。親が大事にしているのは公園がきれいであることよりもお金のことで、成長とともにお金がかかる。
- ・生まれてすぐはお金がもらえるが、大きくなるにつれて手は離れるけど、小さいときよりもお金はかかると感じている。継続的なお金の支援が必要。
- ・待機児童が0と言っているにも関わらず、第1希望の園に入れる子どもは少ない。勤務先や自分の家の近くにしたい人がほとんどだと思うが、第3希望以内に入れる人は少ないと感じている。
- ・託児付きの職場もかなり少なく、付いていても資格が必要だったりする。子連れで勤務できる場所も少ない。長期休暇が一番大変で、保育園や幼稚園に預けるにしてもお金がかかる。小学低学年までは自宅に1人で置くのに抵抗がある保護者が多いので、長期休暇中は仕事を休んだりして家庭に負担がかかる。
- ・お金の支援は、ひと家庭いくらではなく、年齢制限なく、未成年であれば1人につきいくらにしてほしい。

【子育て支援課】

- ・お金のことは、江別市だけではなく、全国で出産や育児にかかるお金の心配がないようになれば良いと思っているが、江別市で何ができるかを考えなければならない。
- ・江別市役所も子連れで勤務できない。我々から変えていく必要があるのではないかと感じた。

【保護者④】

- ・江別市でしか子育てしたことがないが、子育てしやすいまちでよかった。
- ・金銭的な援助があればあるだけもらえればありがたいというのが正直なところ。ゴミ袋の券は、一度も買ったことがないくらい助かっている。絶対必要なミルクやおむつなどの援助があると助かる。特に現金支給があれば嬉しい。
- ・子育てに関する情報を得る機会がなかなかない。支援センターで職員と話していて知ることが多い。一番感じたのは、2歳から通える幼稚園があるというのをぽこあぽこの子育て支援コーディネーターに聞いたとき。2歳から幼稚園に行けるという発想がなかったので、そういう情報を手軽に調べられたら良い。

【子育て支援課】

- ・情報発信に関しては、市役所も不得意なところ。知ってもらえていないのであれば、やってないのと同じ。市役所もLINEなどの取組をしているが、子育てに関する情報発信をどのようにするか考えたい。

【保護者⑤】

- ・希望した保育園に入れなかったので育休を延長することになった。ママ友に聞いても希望の園には入れなかったり、認定こども園を諦めて小規模保育園に入ることにした人が多かった。
- ・見学時に聞いた話だと、ここ数年で小規模保育園が増えているというが、結局6歳まで見てくれる保育園は増えていないので、3歳になって卒業した時に争奪戦になるという話を聞くと、最初から小学校入学まで預かってくれるところに入れたい。
- ・勤務先が車通勤禁止なのでJRで通勤しているが、保育園から迎えに来てくださいと言われても、家に車を取りに行ったりすると1時間半とかかかってしまう。同じようなことで困っている人は多いと思う。なるべく家の近くや希望順位の上の方で入れるようにしてほしい。
- ・札幌から転入してきたが、札幌では駐車スペースがない子育て支援センターも多く、利用したことがない。江別市はそういう面では困ったことがなく、恵まれている。
- ・支援センターで知り合う人で、最初は1人で利用する勇気がなかったという人が何人かいた。地域の遊び場でも、普段どこに行っているのかという会話になり、知らないこともある。転入した時に、こういう施設があると説明を受けていると思うが、子育てで忙しく覚えていない。子どもと2人きりで孤独を感じていたものの、子育て支援センターに来てグループができていて思っていて勇気がなかった。孤独を感じている人もいると思うので、情報が得やすくなると良い。

【子育て支援課】

- ・千葉県流山市は子育てで有名なまちだが、市内より東京で働いている人が多く、そのため駅の近くに送迎ステーションを作っている。朝はそこで子どもを預ければそれぞれの園に運んでくれて、帰りもそこで全部完結するというもの。保育園の入所枠を増やすのが一番いいのかもしれないが、何ができるのか検討が必要。
- ・情報発信についても、新しい場所に行くのは勇気がいることだと思うので、後押ししてくれるものやサポートしてくれるもの、市役所がもっと気軽に相談できる場所であったら良い。

【保護者⑥】

- ・去年10月から産休、今年2月に出産して育休手当をもらっていない。ミルクやおむつを買うのはお金がかかるので、無料券などの支援があるとありがたい。
- ・子どもと遊びながらご飯を食べられるところが少ない。行くとしても札幌で、車だとガソリン代がかかる。

【子育て支援課職員】

- ・上の子どもが2歳の時に江別に引っ越してきたが、そのタイミングでは保育園に入れず、小規模も検討したが3歳までしか見てもらえないので、3歳になったらどこ

に入れようかという話にもなった。妻が育休中でいろいろ調べてくれたが、そこま
でしなきゃダメなのかと思うくらいその大変さが伝わってきた。その後、園も近く
で見つけて希望を出すというのを何回も続けて、どうにか見つけられた。

- ・江別市のホームページが見つらいのでは。調べても出てこないし、どこを見て書い
た情報なのかと思うことがある。自分も市役所の立場ではあるが、もう少し見やす
いものになると良い。
- ・全天候型の室内で遊べる場所がもっとあると良い。ぽこあぽこに行っても1時間
待ちとかで、結局他の所に行くことになる。
- ・父親がおむつを替えられる施設が少ない。妻と一緒にいる時はいいが、いなかった
時に困る。捨てる場所もない。父親が育児に参加する機会が持てる施設がもっと
増えれば母親の助けになるのではないかな。



(2) お子さんが毎日を楽しく、安心して過ごすために大切にしていること

【子育て支援課職員】

- ・元々あまり残業がない部署にいたので子どものお迎えも行けたが、最近は遅くなりがちなことあって、なかなか子どもたちの話が聞けない。6歳と4歳ですぐけんかするので、話を聞いてみて、子どもが自分で考えられるように話している。園でも、お友達とけんかになったりしてあの子がヤダとなっても困るので、同じように伝えている。友達と楽しく遊んでくれるのが一番。最近の子どもたちは頭の回転が速いので、その辺を気にしている。

【子育て支援課】

- ・子どもも1人の人間としていろいろな考えを持っているということを意識して、子どもの意見を聞いた上で、大人としてのアドバイスをしていることが素晴らしいと思った。

【保護者⑥】

- ・挨拶ができるとか、ごめんなさいが言えるなど、常識のある子どもに育ててほしい。

【保護者⑤】

- ・なるべくネガティブな言葉や否定的な言葉を使わない育児をしたいと思っていたが、自分に余裕がないと、そのイライラが子どもに伝わっているのが分かる。もっと余裕をもって、子どもとゆったり接してあげたい。

【子育て支援課】

- ・2歳ぐらいになると、親の感情や言葉は伝わっていると感じる。子どものいる前でイライラしないようにしたいと思うがなかなか難しい。
- ・子どもが安心して成長できるようにというのも子どもの権利の1つなので、そういうまちになるようにしていかなければならない。

【保護者④】

- ・上の子が下の子に嫉妬する。上の子の気持ちを優先してあげたいこともあり、下の子には我慢させていることもある。
- ・やりたいことや行きたいところなど、子どもの希望はある程度かなえてあげたいが、経済的に余裕がないとできない。経済的な余裕が心の余裕につながるので援助してほしい。

【子育て支援課】

- ・上の子の気持ちを優先したいということを大切にしているのは素晴らしいと思う。子どもも嫉妬するには理由があると思うので、しっかり受け止めて対応されている。
- ・子どもの権利とわがままの違いを聞かれることもある。子どもには遊ぶ権利があるが、夜中に遊びたいというのはわがままになる。状況や時間、人との関係性の中でわがままと権利は変わってくると思う。

【保護者③】

- ・資料に載っていた子どもへのアンケートで、「家族と一緒に過ごしたい」が一番多くてびっくりした。
- ・権利条例が子どもたちを守るものだとしても、捉え方によってはいいようにも悪いようにもなり、不都合なことが生まれるのではないか。

【子育て支援課】

- ・子どもたちにとって不都合なものになるものは、想定はしていないが、そうならないようにしていかなければならない。権利が侵害されたときに救済できるようなものは必要で、そちらは考えているが、確かに条例によって縛られるなど、良い面と悪い面があるかもしれない。気を付けながら検討する必要があると思った。

【保護者③】

- ・子どもが犯罪に巻き込まれないように日頃思っていて、家の前が通学路なので見守りがてら外に出ている。何かあったら警察や学校からメールが届くようになっているが、タイムラグが多く、前日の事件のことが届くこともある。声掛けだけだったら簡単な内容でいいので一報ほしい。

【保護者②】

- ・小さいうちはとにかく褒めてあげたい。ただ、それも余裕があるときとないときで全然違って、気が付くと自分が無表情になっていることがある。子どもが小さくて何を言っても伝わらないことも多いが、褒めて伸ばしてあげたい。
- ・保護者によって理想の子育てやこうなってほしいというのはいろいろなので、気持ちよく余裕をもって実現できる権利になると良い。

【子育て支援課】

- ・「成長する権利」や「守られる権利」は、親の余裕がないとうまくいかない場面もあると思う。子どもだけではなく、家庭の支援も重要だと感じた。

【保護者①】

- ・子どもには強いメンタルを持ってほしい。上の子が幼稚園に入園したが、大きい幼稚園なこともあって合わないかとも思いつつ入園させた。夫が単身赴任ですべてがワンオペということもあり、余裕がないこともある。最近は怒ったりしてしまって「ママ、そんなに怒らないで」「笑って」と言われることもある。
- ・子どもとの時間を大切にしようと思っている。夕食の準備を先に終わらせたりして、幼稚園から帰ってきたら子どもと遊べるようにしている。

【子育て支援課】

- ・子どもも自分の意見を言っている。「笑って」など、子どもに気付かされる。大人が思っている以上に気持ちを口に出せると感じる。
- ・子どもはもちろん、家庭への支援を必要とされているということがよく分かった。子育て支援課として、今回出た意見を参考にしながら進めていきたい。

若者の支援機関のみなさんとの意見交換会

開催日時：令和7年9月17日（水）午前10時～

開催場所：総合社会福祉センター

参加者：くらしサポートえべつ、江別・岩見沢若者サポートステーション、さっぽろ若者サポートステーションの相談員 4名

議題：（1）若者にとって必要な居場所とは
（2）子どもにとって大切な権利はなにか
それを守るためには、どのようなことが必要か

（1）若者にとって必要な居場所とは

【くらしサポートセンターえべつ①】

- ・生活に行き詰って相談に来られる方の話を聞いていると、いろいろな経験が不足している方が多い。成功・失敗体験ができる場所、何かができる場所があると良いが、何もしない場所など目的の有無に関わらない多種多様な居場所が必要。その中で、本人が必要なタイミングで必要な情報が得られるような場所があると良い。
- ・支援者は「何かしてあげよう」「何かしなきゃ」「どこかにつながなきゃ」といった視点で関わるが多くなっていて、それはあまり良くないことと感じている。ひきこもりの居場所を支援する中で、当事者の方もよく言われるので、それを忘れずに居場所づくりをしていきたい。
- ・まずは居場所の入口の整備をしなければならないが、出口も考える必要がある。居場所の中で出てきた課題への対応や支援の仕組みづくりをしていかなければならない。居場所に合わなかった人が除外されたり、「ここに居られなかった」という思いをしてほしくないなので、いろいろな居場所が必要と感じている。

【くらしサポートセンターえべつ②】

- ・経済的な相談からつながる方が多く、両親と一緒に両親だけで来られる。本人は「連れてこられた」という感覚が最初は強い。
- ・居場所については、目標をもって参加するというより、いつでも帰ってこられる場所、何もしなくてもいい場所であると良い。
- ・研修に参加した際、主催者側の人手不足が起こっているとの話が出た。せっかくつながりができて、良い場所だったとしても、後継者がいないなどの主催者の都合で閉じてしまうこともある。居場所の主催者に負担がかかりすぎているので、その部分にも配慮する必要がある。

【江別・岩見沢若者サポートステーション】

- ・サポステは働いた後の相談もできる場所なので、仕事のない土曜日にもたくさんの方が来てくれて居場所になっていると実感している。
- ・相談すること自体もパワーが必要なため、パワーが残っているうちにどこかにつながってほしい。
- ・相談のハードルを下げたくてブログを書いているが、居場所に関しても行きにくい

場所では絶対駄目だと思う。安心・安全が大前提で、ジャッジしない、否定しない、説教しない、決めつけないことが大事。

- ・所属がないということで不安になる方が多く、学校や家庭以外の第三の居場所としてサポステがその1つになっていたら嬉しい。
- ・常設で必ず誰かがいて、一旦相談を受け止めてどこかにつなげることができる場所があると良い。例えば、曜日によってテーマを決めてイベントをやったり、江別市のバーチャル空間があっても良い。
- ・苫小牧市の共生型地域福祉拠点のみんなの居場所という集まりに参加しているが、交流サロン、図書館、行政と1つの会社が共催して、B型・A型事業所が一緒になった居場所ができている。そういうのが江別市にもあったら良い。
- ・利用者にヤングケアラー経験者がいて、居場所づくりに関心を持っている。児童館を居場所にしていたとのことで、当事者の意見を聞けると良い。

【さっぽろ若者サポートステーション】

- ・10代の学生生活に焦点を当てると、学びというのは授業の学びと放課後の学びに分けられる。最近是不登校や通信制の高校を選ぶ方も増えている。授業についていけて、具体的に学ぶことができた人に与えられるのが放課後の学び。学校に行かないと放課後の学びは選べない。二重の排除がなされてしまっている。10代の心の成長を考えると、授業の学びも大切だが、放課後の学びを保障していくことが大人の責務であり、教育ではできない部分は外部の支援者がやるべきことだと思う。
- ・放課後の学びは学校生活がうまくいっている人に紐づいたオプションのようになっているので、支援者はそこに近づけるようにできる限りの投資をしていく必要がある。
- ・居場所は無目的でもいられることが大前提。中高生に話を聞いても、単なるスペースが欲しいのではなく、人がいて、自分が認められるような場所を求めている。

【子育て支援課職員】

- ・民生委員に聞くと、江別市は公園が小さい、遊具が古いなど、小さい子どもが遊ぶ場所が少なく、高学年になるとイオンくらいしか遊ぶ場所がないと言われる。
- ・自分が以前に住んでいたまちでは、バスターミナルの上にスペースがあって、勉強スペースやふれあいのスペースなどに分かれていた。目的に合わせて子どもたちが集まれる場所があると良い。

【子育て支援課】

- ・居場所づくりをするにあたって視察に行った。同じ空間の中に、遊んでいる子、おしゃべりしている子、1人でいる子がいたりして、江別市にはない場所だと思いながら見ていた。

【くらしサポートセンターえべつ①】

- ・1人でいたいという人に対して、支援員がグイグイ支援したり、目的のあるところに結び付けようとするのはいけない。
- ・今の中高生の1人でいたいというニーズはどのくらいあるのか気になっている。学校、SNS、家庭でのキャラクターを作っていて、使い分けなければならない人も多

いのではないか。家庭が素の自分を出せる場であれば良いが、必ずしもそうとは限らないので、どこかでパンクしてしまうのではないか。だからこそ1人で何も考えずにいられる場所は大事。

【子育て支援課】

- ・国の指針では、家庭や学校以外の第三の居場所づくりが新たな課題として位置づけられている。江別市でも、家庭や学校以外の居場所づくりを考えていかなければならない。
- ・成功体験ができる場所も何もしなくてもいい場所もどちらも必要。江別市内や他自治体での例があれば教えていただきたい。

【江別・岩見沢若者サポートステーション】

- ・PTAをやっていたが、お祭りなどで娘がお手伝いをしていた。学生のサークルが参加したり、小学校の卒業生も参加したり、地域を巻き込んでやっていた。もちろんボランティアだがすごく活躍していた。地域のイベントに参加するのは良い。今もラジオ体操のハンコを押したりいきいき活躍している。
- ・「〇〇が行っているから行けない」など、全員がいられる場所というのは絶対にないので、時間や場所を変えるなどの対策が必要と考える。
- ・先生や親に言わないと行けない場所には行かないので、断りがいらない場所が良い。親が「〇〇に行ってたなら大丈夫」と言える場所になると良い。

【子育て支援課】

- ・日本全国でひきこもりや不登校は右肩上がり、江別市でも増えている。学校や学校以外で自分を演じなければならないということにつながっているのではと感じる。
- ・東京で居場所づくりを実践しているNPO法人カタリバと意見交換を行ったが、学校や親は縦の関係、友だちは横の関係、カタリバは斜めの関係で、それを目指しているとのこと。みなさんの話を聞いていてまさにそういうことかと思った。
- ・「ここに行ったなら安心」ということはカタリバの方も話していた。文京区にあるb-lab（ビーラボ）は、区がやっているからこそ親が安心して行ってきていいよと言える。江別市にはそういう場所がない。
- ・多種多様な居場所が必要だと思う一方、行政の限界も感じている。居場所づくりをしたい人を後押しすることも行政の役割であると感じている。

【子育て支援課】

- ・日頃相談を受けたときに、複合的な課題がある場合や他の相談機関につなぐ必要性が生じた場合、どのように対応しているのか。

【くらしサポートセンターえべつ②】

- ・相談者の状況によって異なる。医療機関や障がいに関する機関、サポステ、ハローワークなど。すぐに振れるものではないので、定期的に話を聞いて、動けるタイミングまで待つ。その間に自己肯定感を上げる仕組みが必要。ボランティアでは得られない経験や工賃が得られる仕組みや、中間的就労のような場も重要である。相談

者は、それによって就労に対する意欲が出てくる。居場所の1つとしても機能していると思う。

【子育て支援課】

- ・中間的就労に至った方は、どうしてそうなったのか、逆に何があればそうならなかったのか、具体例があれば教えていただきたい。

【くらしサポートセンターえべつ②】

- ・高校や大学の卒業で途切れてしまう。不採用が続いたり、働きはじめても1、2カ月で辞めるという経験が大きく、そこから動けなくなってしまう。家族も最初はなんとかしなければと思っているが難しい。

【子育て支援課】

- ・障がいの有無が起因している場合もあるのか。

【くらしサポートセンターえべつ①】

- ・全く問題ない方もいると思うし、高学歴の方もいるが、療育や発達障害があるように見受けられる方もいる。もっと早く気づいてあげられたはずというケースもある。

【江別・岩見沢若者サポートステーション】

- ・えべつ障がい者しごと相談室「すてら」につなぐケースが多い。サポステとすてらはどちらも使い続けて問題ないので、渡したからと言ってきよならではなく、一緒に面談するパターンも多い。
- ・自立支援協議会に所属しているので、B型事業所で居場所になりそうなところと一緒にいたり、相談員をつけてもらったりしている。
- ・まちなか仕事プラザは市が設置した施設なのが強みで、サポステを使いながらまちなか仕事プラザにも登録している人もいて、面談同席をしている人も何人もいる。昨日案内した方は、本人の意思で来たが、初めての場所ですごく緊張していた。

【子育て支援課】

- ・サポステは就労寄り、くらサポは生活寄りのイメージがあり、役割分担があるのかと思っていたが、話を聞くとそうでもない様子だと感じた。

【江別・岩見沢若者サポートステーション】

- ・利用者による部分が多い。サポステはハローワークの一步手前の機関だが、根の部分は一緒のことが多いので住み分けは難しい。

【さっぽろ若者サポートステーション】

- ・就労の相談に対していちばんハードルが低いのがサポステ。サポステに来る相談は「働く」ということに向き合うための総合相談に近い。総合相談窓口があるのが良いのか、江別市では全部網羅されているのかはまだわからない。
- ・いずれ働きたいという人に就労支援が刺さるのは、機が熟すまで待たなければならない。その期間の居場所が江別市内にあると良い。いろいろな体験ができて、手当ももらえるような場所。支援臭がしないことが大事。「手伝ってもらおう」や「支援してもらおう」ではなく、自分たち（利用者）が手伝ったことで評価を受け、自己肯

定感が上がっていくような空間。

【子育て支援課】

- ・全国の自治体でイメージに近い自治体はあるか。

【さっぽろ若者サポートステーション】

- ・札幌市のYouth+センターが近い。居場所を作った後は、本当に必要な人が利用できているのかということが大事にある。私たちは居場所で待っているだけではいけないので、アウトリーチをして本当に必要な人とつながる必要がある。そのような点から言うと、学校へのアプローチが重要である。学校に行っている・行っていないに関わらず、学校に所属しているうちはアプローチの選択肢は残っている。

【江別・岩見沢若者サポートステーション】

- ・野幌高校は定期的に行っていて、3年生全体に年2回講演している。卒業しても相談できる場所を知ってもらう取組は重要である。

【さっぽろ若者サポートステーション】

- ・Youth+センターは、平成22（2010）年開始の若者支援施設である。札幌市の所管は、子どもの権利推進課で、やりたいことを実現したり、やりたいことがなくてもいられて、自分が認められる空間を目指している。場所は、昔の勤労青少年ホームを利用している。

【子育て支援課】

- ・江別市に期待することはどんなことか。

【江別・岩見沢若者サポートステーション】

- ・市役所を新しくするときには何を作るのか気になっている。フリースペースはあってほしい。市民交流施設「ぷらっと」では、冊子などを置いて市民活動を応援している。WEBも大事だが、紙の情報もあると安心という声もあるので、似たようなスペースがあると良い。また、総合相談まではいかなくても、相談先などを案内してくれる人がいれば良い。

【子育て支援課】

- ・新庁舎は令和10年度に共用が開始される予定。当初よりも建築費用が高くなっていて、庁舎が小さくなってきているが、勉強もできる展望スペースができる予定。福祉関係の相談を一つの窓口で受けられるようにしている自治体もある。江別市も様々な検討をしているところである。

【江別・岩見沢若者サポートステーション】

- ・ホームページが新しくなってほしい。堅いイメージ。パステルカラーにしたり、えべちゅんをあしらったりかわいらしくしてほしい。

【くらしサポートセンターえべつ①】

- ・市役所に行くことのハードルが高いという方が多い。敷居が高く感じてしまう。中高生の行きやすさも考えなければならない。ホームページが柔らかいとまた違うのかもしれない。

【子育て支援課】

- ・ホームページの課題は認識している。何とかしていきたい。

【さっぽろ若者サポートステーション】

- ・総合案内所は良い。1つの団体がやるのではなく、江別の横のつながりを活かして日替わりでやるのが良いのではないかな。

【子育て支援課】

- ・福祉の相談を網羅するのは難しさがああり、技術も必要であることから、検討を重ねていく。

【江別・岩見沢若者サポートステーション】

- ・同じような意見は何度か聞いた。なんでも屋さんではないが、ワンストップでいろんなことを知っている人や組織があるとつなげられる。選択肢はいっぱいあった方が良い。支援者としても1人で抱え込まないことが大事なので協力し合うことが重要である。

【江別・岩見沢若者サポートステーション】

- ・夢のような話だが、高齢者の家にはタッチパネルがあって、SOSを出せたり、調べ物ができると良い。



(2) 子どもにとって大切だと思う権利は何か それが守られるためには、どのようなことが必要か

【さっぽろ若者サポートステーション】

- ・子どもが主役というのが肝。ヤングケアラーの課題も、権利が阻害されてしまうということに通ずる。いかに子どもが自分のための時間を認識して過ごすことが大事。ヤングケアラーは主役が相手になってしまうことが多々ある。10代のころの成長のためには、いろいろな経験をする必要があり、20代、30代になって取り戻そうとしてもうまくいかないケースが多い。

【江別・岩見沢若者サポートステーション】

- ・日頃から、自分の価値観や考え、スタンスという意味で「自分軸」という言葉を使っている。親の価値観に翻弄されてしまい、大人になって実際動いてみたら違って気付くということがある。小さい頃から自分らしさや自分の意見が言える環境であることが大事。
- ・赤ちゃん検診の延長のような、定期的に学校や家庭に第三者の目が入るタイミングがあると良い。ある企業では月に1回個人面談があり、雇用の安定につながっているとのこと。子どもでもそのような場があると良い。

【くらしサポートセンターえべつ①】

- ・安心安全に自分らしく、自分がしたいことができる権利と思っている。相談者の中にもアダルトチルドレンと言われる人がいて、子どもの頃の経験から生きづらさを感じている。関わるタイミングを増やすのは良い。つながる場所を増やして孤立させないことが大事。

【くらしサポートセンターえべつ②】

- ・経験することが大事。家庭環境によって左右されてしまうのは日頃の相談でも感じている。一方で、親も困っている可能性があるので、子どもに対する仕組みとともに親に対する仕組みを整備することも必要。
- ・自分（子ども）が主役ではあるが、隣の子どもの主役なので、子ども同士もお互いを尊重し合うことも大事だと思う。

【子育て支援課職員】

- ・プライバシーや名誉の保護、適切な情報の入手が大切。スマートフォンの普及で、なんでも調べられて便利な反面、配慮されるべきニュースや映像が見たくなくても見えてしまう状態が普通になってしまっている。ボタン一つで自分も他人も一発で壊してしまう。親や親以外の話せる人、居場所など相談や経験ができる環境が必要。

江別介護ママの会のみなさんとの意見交換会

開催日時：令和7年9月18日（木）午後0時～

開催場所：総合社会福祉センター

参加者：江別介護ママの会 4名

議題：（１）子どもが健やかに成長するために必要なこと
（２）子どもにとって大切な権利はなにか
それを守るためには、どのようなことが必要か

（１）子どもが健やかに成長するために必要なこと

【江別介護ママの会①】

- ・障がいの有無に関わらず、すべての子どもたちが未来に希望を持てるようにしてほしい。特に、移動が困難な重い障がいのある子どもたちが、地域から孤立することのないように配慮をお願いしたい。共生のまちを進める江別市にふさわしい条例を制定してほしい。
- ・移動に関する社会資源がほぼない。外出が困難な人たちが孤立しないようにしてほしい。

【江別介護ママの会②】

- ・息子に医療ケアは必要ないが、重度なので24時間誰かがケアしなければならない。頭が痒い時に誰かに頼むこと、冷蔵庫に何があるか見たいこと、テレビが何をやっているか知ること、野球の延長戦を見終わってからお風呂に入りたい、というのはすべて権利だと思う。家族はカテゴリー関係なく対応するが、社会はカテゴリーがわかれている。入浴のサービスを受けるにしても、本人の気分や体調によっては受けられず、キャンセルしたら事業者にも迷惑がかかる。次のサービスの時まで入浴できないなど不便さを感じる。
- ・子どもの権利は親が守らなければならない。家族が世話をできなくなったら社会がどれだけお手伝いしてくれるのか考えて準備はしている。福祉業界の待遇が悪く、社会資源が足りない。何かあったときの保険がない状態。
- ・今は学校にも行けていて、我慢しながらも今の生活を維持している。成人すると重度訪問介護のサービスが受けられるが、それぞれの子どもにあったサービスを提供してほしい。学校に行く移動支援は、働いていないと受けられないが、学校の送迎があるから仕事ができないという悪循環が起こっている。
- ・カテゴリーごとではなく、全部をひっくるめて家族のように時間に寄り添ってくれるサービスが必要であり、それが、重度訪問介護なのか疑問はあるが、できることをやってほしい。

【子育て支援課】

- ・自分が高齢になっていく中で、今のケアを続けられるのか不安に思うのはそのとおりだと思う。そういったことがないように地域を変えていかなければならないし、国の制度がニーズに合っていないことも考えられる。

- ・医療的ケアに関する理解不足も多いと感じた。子どもであっても1人の権利の主体として扱い、自分や地域は何ができるのか考えなければならないと思う。

【江別介護ママの会③】

- ・子どもは脳性麻痺で座位がとれないので全介護状態にある。知的面の障がいはないので普通学級だった。子どもたちからのストレートな言葉も学びになり、人間関係を築けた。高校は自宅を離れて宿舎で生活したが、それも学びがあった。
- ・自分は医療的ケア児のデイサービスで働いていて、子どもはサービスを使いながら今の生活ができていて、B型就労で働いている。医療的ケアが必要な子どもは事業所が預かってくれないし、送迎がない。江別市には18歳以上の医療的ケア児を預かるところが「かりんの華」しかない。児童は「風の丘」があるが、生活介護はやっておらず、「かりんの華」も定員5人なので余裕はない。移動支援に看護師が同乗するところが少ないので親が送迎になってしまい、数時間しか子どもと離れられない。学校があるうちはいいが、卒業した後は家にいる時間が多くなる。24時間の中でヘルパーを使っている時間は1時間程度で、ほぼ家族が対応している。
- ・将来1人暮らしをしたいと言っているので1人向けのグループホームを考えてはいるが、江別市にはないので出ることも考えている。

【子育て支援課】

- ・江別市には高等養護学校がないので、市外に出なければならない。市外にでる負担は重く、地域で生活したいという思いもあると思う。毎年道に要望は出しているが、数としては足りているということで通らない。インクルーシブ教育が進んでいて、高等養護学校へのニーズが減っているのが理由とのこと。
- ・家族の負担についても、ある程度余力がないと疲れてしまう。そうならないような支援が必要ではあるが、事業所の少なさが江別市の課題。事業所を増やすということで市ができることは少ないが、障がい福祉課にもみなさんのお話を共有しながら市として考えていきたい。

【江別介護ママの会④】

- ・フルタイムで働いているので、いろいろなサービスを使わせてもらっている。今は生活介護の事業所に行っているが、切れ目なく支援してもらえるようになった。それまではたくさんの事業所に断られた。夫婦2人で休みやサービスを使って何とか綱渡りしている。
- ・親や家族が幸せでないと、子どもは幸せにはなれない。仕事は大変だが、いろいろな情報も入るし、気分転換にもなり、子育てをするためにはお金の面だけではなく心の面でも必要で、就労意欲のある親への支援は子どもを守るためにも大事。自分は習い事もしているが夜に夫が見てくれるからできている。気分転換は必要。
- ・兄と双子で、双子はきずなが強い。障がいのある子を他のきょうだいと離して育ててしまった場合、きょうだいたちが「邪魔なもの」や「恥ずかしい」といった気持ちになってほしくなかった。常に一緒に育てようと決めて江別市を選んだ。結果的にきょうだいは、障がいのある子との交流が得意な子になった。高校は札幌だったが、障がいのある子に慣れていない人が多く、違和感があったと言っていた。

- ・「障がいのある人を大事にしよう」や「彼らのことを考えましょう」といった呼びかけをしたとしても、障がいのある人と一緒に育っていない人には遠い国の人の話なのではないか。社会に出ると、障がいのある人と関わる機会はより少なくなり、どうやって理解するのかという話になる。インクルーシブ教育の意向がある家族には、交流や一緒に何かをやるという場を作ってほしい。

【子育て支援課】

- ・働き続けられる環境づくりは非常に重要。家以外に居場所があることも重要。自分で抱え込まないように、地域全体で家庭や子どもを支える意識が必要。
- ・近くに発生しないと自分事になれないのは本当にそうで、地域の人とふれあうことや子どもの時に大学生とふれあうなどと同じように、障がいのある人とふれあうこともそういうこと。お互いにとってメリットはあるのでそういう機会が作れないか。

【子育て支援課職員】

- ・知ってもらえることが一番必要だと思った。保健師として保健センターでいろいろな方に関わってきたが、今回の内容についてはまだ知らない部分も多かった。知らない方もいるからサービス等も充実していかないのかとも思った。
- ・条例ができた際には、皆さんの声も含めて、作ったものを広く知ってもらえることを大切にしていきたい。



(2) 子どもにとって大切な権利はなにか それを守るためには、どのようなことが必要か

【子育て支援課職員】

- ・いろいろな権利が守られるべきだと思う。
- ・「健やかに成長」は身体的だけではなく、こころの健康を守るためには自分の意見ややりたいことを示す権利も大事。親や支援者など、意見を汲み取る人がいることも大切。

【子育て支援課】

- ・子どもの意見を代弁したり、代わりに意見を述べる人や場所が必要かもしれない。
- ・中高生のワークショップをやったときに学校側からは、子どもたちの発言や行動がどういう結果になったのか発表してほしいし、意見を取り入れてほしいと要望があった。
- ・市役所や地域に対して自分の考えを言うことで社会が変わるという経験は非常に重要。大人もそれを受け入れる覚悟が必要。

【江別介護ママの会①】

- ・本日来る予定だった方が、子どもの発熱で来られなくなった。真ん中の子は学校に行けていない。彼が学校に行く権利はどうなるのだろうか。当事者が発信しないとわからないので、当事者が発信してみなさん考えてほしい。
- ・きょうだいが体調を崩しても健常児だったら歩いて学校に行けるが、そうじゃない人たちは学校を休まなければならない。きょうだい児の問題もある。

【子育て支援課】

- ・ヤングケアラーの話にも通じる。本人は当たり前のようにやっていることも、実は権利が侵害されているということも多々あるのかもしれない。周りが気付いてあげて、手を差し伸べられる環境が必要。

【江別介護ママの会②】

- ・子どもの権利条例に関する知識を身につけた上で、言動や行動を考えなくてはならない。悲しみや憤りも感じたが、感謝や喜びも感じている。昨年、修学旅行があったが、オリジナルの車椅子なので先生が頑張って車椅子用のバスをチャーターしてくれた。差額の負担は親。特別支援奨励費はあるが、うちは一銭ももらえない。払える人には払ってもらうシステムではあるが、教育を受ける権利としてはどうなのか。担任と介助の先生がいたが、ほかの生徒のこともあって忙しく、親がついていくことになった。親が行けなければ子どもも行けないのか。市議会議員に一般質問してもらったり、教育委員会に相談したりしたが、「前例がない」で対応してもらえない。結局旅行会社がバス代を半分負担してくれた。
- ・一般質問では「お金は払います」とのことだったが、奨励費で対応していますとのこと。奨励費は権利とは別の話。次の子どもたちが困らないような社会になってほしい。
- ・行政が前例に倣う形になっていて、チャレンジしていないと感じている。

- ・障がい者も健常者も一緒にいることでわかることや知ることができ、身近になって考える子どもたちが増える。一緒にいられる場所を作してほしい。

【子育て支援課】

- ・大人よりも子どもたちの方が障がいの有無に関わらず、1人の人として接している感覚がある。大人の方が区別してしまっている。
- ・子どもが教育を受ける権利は誰しもあって、授業を受けることはもちろん、修学旅行に行くことや友達と一緒にいることも教育を受ける権利として考えていかなければならない。行政側として認識が薄い部分があるのかもしれない。
- ・子どもの権利を考えるにあたり、教育委員会との連携が非常に重要になる。教育委員会は学校教育を見るという考え方だったが、一緒に動いていくことになっていくと思っている。
- ・子どもの権利条例ができててもすぐに答えは出ないが、できたことによって市全体で意識をすれば変わってくるかもしれない。意識の差は大きい。

【江別介護ママの会④】

- ・担任の先生はすごく大事。ひどい先生といい先生、両極端な先生にあたった。ひどいと感じた先生について、小学校の時に、学年が上がって教室が1階から2階になった。特別支援学級は1階だったので、給食は普通級で食べることができたが、「2階になったのでできません」と言われた。教頭に相談したら、毎日ではないがみんなで食べる機会を作ってくれ、時間はかかったが壊れた昇降機も直してくれた。担任は、「障がいのある子は遠慮して端っこにいなさい」という感覚だった。
- ・子どもの権利や教育は担任の考えひとつで簡単に崩れてしまう。ほかの先生も、自分の担任でなければあまり言えないのでは。毎日送迎をされていて違和感があった。学校の自浄作用でどこまでできるのか。権利と一緒に先生たちの意識がどこまで寄り添ってもらえるのか。そこが機能する条例にしてほしい。

【子育て支援課】

- ・受け入れ体制が整っていないことや、教師の認識が希薄な部分もあるかもしれない。以前、同様の意見交換をした際には、意識改革のため、教師にこそ子どもの権利について知ってもらう機会が必要との声が多かった。

子どもの居場所づくり実践者のみなさんとの意見交換会

開催日時：令和7年9月29日（月）午後1時30分～

開催場所：いきいきセンターさわまち

参加者：子どもの居場所づくりの実践者（NPO 法人恩おくり） 4名

議題：（1）子ども食堂の役割と今後の課題

（2）子どもにとって大切な権利はなにか
それを守るためには、どのようなことが必要か

（1）子ども食堂の役割と今後の課題

【NPO 法人恩おくり①】

- ・ NPO法人になる前から子ども食堂を運営していた。地域の居場所を作ることを目的として、高齢者や子どもを含めた地域の方に対して始まった。当初は高齢者の方も顔を見せていたが、どんどん回数が減っていった。子ども食堂を開催して、子どもと高齢者が一緒に食べたり遊んだりしてもらっている。子どもは来てくれているが、地域の方との結びつきが少ない。
- ・ 江別市においては、子ども食堂の活動は活発に行われている。自負していることはフードバンク。フードドライブをやりながら、フードバンクで得た食材などを各子ども食堂に提供していることは、キーになる法人になっているのではないかと感じる。
- ・ 子どもと接することはなかなか難しい。自分の孫だと一喝するような場面でも、他人の子どもだと怒ることができない。そんな中でも子どもは生き生きと遊んだり、勉強したり、子ども同士で話し合いをしたりしている。親も一時的にでも安心して預けていられる場所であると良い。
- ・ 子ども食堂は、食事を通して、ものの大切さなどを養っていける場所。

【子育て支援課】

- ・ 当初、子どもの貧困対策の流れの中でフードバンクや子ども食堂という言葉が使われていたが、最近は子どもの居場所として位置づけられており、役割は年々大きくなっていると感じている。

【NPO 法人恩おくり①】

- ・ 活動を始めて3年。まだ年数は少ないし、来ている子どももある程度限定されているが、子どもが成長して、お手伝いをするようになり、他の子どもを気に掛ける場面などを見ると、家ではない場所で何かを見出したり、発揮していると感じる。

【子育て支援課】

- ・ 取組が地域に広がらないのは、大人の関わりが弱いのでは。子ども食堂は良い取組で応援したいが、何をしたらいいのかわからないという部分がある。自分は何ができるかを明確に伝えられると広げられると感じた。

【NPO 法人恩おくり②】

- ・ 子ども食堂は、平成24年に東京都大田区で、子どもが1人で来て無料でご飯を食

べられる場所として、フードバンクは、貧困問題と食品ロス問題の解消を目的として始まった。山梨県のフードバンク山梨が年十年も取り組んでいる。

- ・子ども食堂も貧困問題が始まりだったこともあり、貧困の子どもが行く場所というイメージがついている。子ども食堂を利用する子どもたちの中に貧困の子どもが混ざることによって救いになっていけばいいと思う一方、社会的なイメージが「貧困の子ども」「親がいない子ども」「親が面倒見てくれない子ども」が行く場所で、抽象化されて「かわいそうな子ども」が行く場所というイメージになっていると感じる。
- ・北海道のネットワークに入っている子ども食堂は、江別市はまだ少ない。札幌市は130カ所以上あり、人口の違いもあるが、イメージは広がりやすく、その影響は江別市にもあると思っている。
- ・江別市で新たに子ども食堂をやりたいという相談をいただくが、人をたくさん呼びたい、売名に使いたいというのが明らかな場合がある。本来運営者側が目指しているものとはかけ離れたところでうまく利用されてしまっている。
- ・地域の人子ども食堂のような場所によってつながることで、やっていない時でも声を掛け合えたり、気に掛けたりできる環境を作ることが役割と感じている。
- ・子どもの自律心が育まれる場所としての役割が求められている。不要な抑圧がない場所で自己表現できる場所はすごく少ない。子どもが言いたいことを言える、やりたいことをやってみる、できないならなんでできないのかを理由を伝えるとともに理解してもらい、次を考えてあげられる場所。家庭や学校ではない第三の居場所として、子ども食堂を求めてもいいのではないか。
- ・子ども食堂のメニューは基本的には大人が考えるが、次に食べたいものを子どもに聞いたり、ボランティアが欠ける時は子どもたちと一緒に作るなど、子どもの意見を大事にしている。子どももその場所を作っていて、役割を担うことで褒められるという経験の積み重ねにより、その場所を離れても自尊心や自己肯定感の向上につながる。自己有用感も大事。いろいろな感覚に出会う場所として子ども食堂は期待されている。
- ・課題としては、世の中の理解とともに運営者側の目的がずれている。たくさんの人に来てもらうことではなく、歩いて行ける場所に子ども食堂がいくつもあって、地域がつながるということを第1目的として完結できることが大事。ただし、広く広報することで必要な人に情報を届けるのは大事。
- ・子ども食堂拡大プロジェクトを市民協働の補助金でやっているが、人を100人呼ぶ子ども食堂を理想とはしていない。

【子育て支援課】

- ・子ども食堂は第三の居場所として期待されている。主に家族や教師などの縦の関係ではない、斜めの関係である人がいること重要。無目的で立ち寄れて、気軽に話もでき、時には役割も与えられて、自己肯定感が上がる場所。
- ・理想は、小規模でも身近に気軽に行ける子ども食堂があることだと思う。

【NPO 法人恩おくり③】

- ・恩おくりに入る前から発達課題のある子どもや保護者に関わるspace coco(スペース ココ)という活動を行っている。その活動も踏まえて、子ども食堂に関わることで感じることもある。食べ物を通じて集まる場所はきっかけとしては行きやすく、子どもたちの素顔が見えやすい。学校では困っているだろうと思われる行動を子ども食堂でするのは、気が抜けているからこそではないかと考えている。
- ・家族でも先生でもない大人に真剣に目を見ながら「それいいの?」と言われることは大事な経験。真剣に自分のことを見てくれていると感じるのでは。地域と子ども食堂に来る子どもの関係は、第三の居場所として重要。
- ・この夏、流しそうめんをしたが、どうやって作るかという中で考えながらやっていた。学校の成績には関係がない、社会で生きていく上で重要な部分、非認知能力のような人とのやり取りを行い、物事を進めていく中で、自己肯定感を上げることは、第三の居場所として良い役割だったと思っている。
- ・今後の課題は、学校との連携や親からの相談にのること。子どもの背景にいる親のことも汲むことは子どもの権利に関わることであり重要。子どもを取り巻く人たちもサポートすることにより、背景が見える関わり方をすることが課題。

【子育て支援課】

- ・千葉県市原市で居場所づくりの話聞いたが、「これだったら私もできる」ということで、子ども食堂はどんどん広がりを見せているそう。食事を通して子どもたちと関わったり、地域とつながることは子ども食堂の強みであると感じている。

【NPO 法人恩おくり④】

- ・子ども食堂の役割は、子どもの居場所として重要で、課題にもつながる部分。子ども食堂を開いて、子どもが来られる場所を整えるだけでは意味がない。
- ・今、子ども食堂の貧困のイメージを変えていこうとしている印象があるが、そうではないと思っている。貧困というとお金の貧困をイメージされるが、居場所が枯渇している、愛情が不足している、勉強・教育の機会が不足している、体験が不足しているなどいろいろな貧困がある。そのいろいろな貧困の格差を是正することが子ども食堂や子どもの居場所である。
- ・最近、洗い物をしたことがないという子どもとよく会う。洗い物をしたことがない、包丁を持ったことがないという子どもが、大人と一緒に料理に触れてみたり、掃除機かけてみるといったことをすることによって、体験の格差を埋める役割がある。
- ・子どもが役割を持つことによって、自分の居場所感を持つことが重要。学校でうまくいっていないということで「自分はダメなんだ」と思いがちだが、子ども食堂に行って話を聞いてもらえれば頑張れるのでは。
- ・子ども食堂を開いても、「毎月月末にカレーライスを出します、食べたら帰ってね」というのでは意味がない。会話を通した関わり方ができる子ども食堂を作ることが求められていくと思う。
- ・活動の中で、何かが不足しているんだろうという子どもはたくさんいる。先生や親にできない関わり方ができて自由なことができる、一息付ける場所は重要。

- ・そういうことを許容できる人が子ども食堂を運営していく必要がある。子どもたちの思いを受け止めて、どういうものが求められているのかということを考え、行政や民間、学校がすり合わせる必要がある。

【子育て支援課】

- ・社会教育を担う場所としても子ども食堂の役割があるのではないか。一方で、コーディネーターのような役割の人が必要だったり、運営の難しさもあるのでは。
- ・今の子どもは、今の大人が子どもだった時とは違う悩みを抱えていて、それを発散する場がない。そういった子どもたちから子ども食堂のような居場所が求められているのではないかと感じた。
- ・行政との連携も重要。行政と子ども食堂それぞれでしかできないことや得意・不得意な分野があるので、一丸となって取り組むことが今後重要になってくる。

【子育て支援課職員】

- ・放課後児童クラブを担当している。学校で我慢している分の反応があるという話がよく出る。クラブで本性を出す子どもが非常に多く、学校ではいい子なのにクラブでは問題がある子のような子もいるようだ。
- ・公園で球技ができなくなっているなど、子どもの居場所が減ってきているのは感じていて、選択肢の1つとしてそういう場所があった方がよい。
- ・話を聞いてあげる場所・コミュニティが小学校しかない逃げ場がない。別のコミュニティで話すことは自己肯定感の向上にもつながり、安心できる場所が必要。
- ・学校で学ばないことをできる場所は大事。

【子育て支援課】

- ・子どもの居場所は、子ども食堂に限らず多様な場があるとよい。
- ・東京都文京区のb-lab（ビーラボ）では、「そこに行きたい」という子どもももちろんいるが、大学生のボランティアに会いに来ているという子どもも多い。居場所はスペースという意味ではなく、人との関わり。コミュニケーションのあり方も重要。

(2) 子どもにとって大切な権利はなにか それを守るためには、どのようなことが必要か

【子育て支援課】

- ・現段階では、子どもの権利と子ども食堂の明確な結びつきは想定していなかったが、条例を作る上で参考になる部分があると思っている。
- ・学ぶという観点で見ると、学校で学ぶこと、地域で学ぶこと、家庭から学ぶことがあるが、学びの機会を提供しているという意味では「教育を受ける権利」にあたる。
- ・「今日は何をしようか」など、自己表現をする場。子どもの意見を大人が受け止めて実行するという経験は子どもたちにとってはかけがえのない機会。子どもの権利の4つの権利の「参加する権利」や「子どもの意見の尊重」につながっているのではないか。

【子育て支援課】

- ・子どもの権利条例の目指すところは、子どもたちが自分らしくいられるためのルールづくり。子ども食堂の活動はまさに学校や家庭ではない第三の居場所で、自分らしくいられる場所の1つとなっている。
- ・去年、「子どもが主役のまち宣言」をして、子どもの権利条例を作ることにしたが、宣言はあくまで宣言で、単なる理念的なものに過ぎない。宣言の根底にある子どもの権利をルールとして守るために、まちの法律である条例を作るようになった。
- ・なぜ子どもの権利を守るのかということについては、「子どもが主役のまち宣言」で一番大事にしている部分で、子どもが幸せであること。大人たちが、「すべての子どもは幸せであること」は大事なことの共通認識を持つのが宣言で、子どもが幸せであるためには、子ども自身が遊ぶ権利や学ぶ権利、参加する権利、意見を言う権利が守られて保障された上で、初めて幸せでいられる。

【NPO 法人恩おくり①】

- ・子どもの後ろにいる保護者がどのように子どもを育てようとしているのか、子ども一人ひとり違う家庭があり、親の思いや育て方がある。子どもの権利を守ると言っても、その後ろにいる保護者も一緒になって子どもを幸せにするということをやっ
ていかなければ、条例を作っても、家庭の中に浸透させるのは難しい。
- ・子ども食堂に来たときに、虐待の様子が見られるとなると、場合によっては児相が絡むといった事例が出てくるかもしれない。それはそれで子ども食堂の意義があると思う。
- ・保護者のことまで考えるのは大変だと思うが、子どもだけ守るという体制を作るとい
うのであればできることは多い。

【子育て支援課】

- ・条例を作ったからと言って、劇的に何かが変わるものではないと思っている。罰則や罰金がある条例ではない。条例を作る意義は、こういう考え方があって、それを大人たちに知ってもらうことにある。
- ・子どもの権利を守るための条例だが、子どもも自己決定の権利があって、1人の人間であるということを親にも知ってもらうきっかけになると思っている。
- ・意見交換会をやっても、子どもの権利にピンと来ていない人もいる。条例づくりをすることによって、子どもの権利を考えてもらえれば成功だと思う。浸透させるのは簡単なことではないと思うが、地道にやっていきたい。

【子育て支援課】

- ・子どもが幸せでいるために、「子どもの権利を尊重」という部分を根底にしているが、それだけでは守れない。そのために必要な項目として、子どもの権利を尊重することと、子ども自身の子育ちを市として支援するとともに、子育てを支援する。子育ても家庭だけではなく、地域全体でやっていかないと今の時代は子育ちも子育ても行き詰ってしまう。子どもを守るための指針としての4項目の中の1つが子どもの権利条例の制定。子どもの権利条例だけですべてができると思っているわけではなく、4つの柱を進めていく上で、根底となる子どもの権利条例を作ることが宣言の中の取組の1つ。
- ・浸透させるのは確かに難しいが、浸透させること自体も条例に載せればルールになるので、市としても取組を強化していかなければならない根拠になる。
- ・子どもの権利自体は、国が子どもの権利条約に批准しているのですでに守られている。令和6年4月にこども基本法ができて、ここで子どもの権利は守られているが誰も知らないのでは。国際的に条約を締結したり、日本で法律ができたと言っても、子どもの権利はわかっていない部分はある。まちとしてルールを作ることは、子どもの権利を浸透させるための1つの取組。
- ・条例を作って終わりだけではなく、宣言に基づいて、子どもの権利を尊重するための条例をつくり、それ以外は子どもの計画などで子育ちの支援、子育ての支援、子育て環境への支援に取り組んでいく。

【NPO 法人恩おくり①】

- ・今の子どもは学童や習い事などで自由に外に出る時間が少なくなっている。江別市のLINEで子どもに対する声掛けなどの不審者の情報が流れてきたりする。また、先生の盗撮があったりして、信頼して授業を受けている子どもたちは誰を信じたらいいのか。その中で、居場所の1つになれると良い。

【NPO 法人恩おくり②】

- ・発達課題などを持つ子の保護者の話を聞く中では、学校から我が子の尊厳の無視や人として扱ってもらえていない、子どもらしく暮らせないということがあるとのこと。そこも汲んでもらいたい。

【子育て支援課】

- ・教育と福祉の連携はますます重要になる。学校は学習指導要領に基づいて教育をするのが役割であって、それ以外は任意の取組となる。権利の話をしてきている学校もあるかもしれないが、一律にお願いできるものではないというのが現状。
- ・条例ができると、学校で取り上げてもらえるきっかけになると思っている。市として取組を進めることで、学校でもお願いしますと言える立場になるのではないか。そのタイミングで先生にも知ってほしいし、子どもの権利について子どもが初めて聞くのは学校であっても良いと思っている。



北海道中央児童相談所のみなさんとの意見交換会

開催日時：令和7年10月3日（月）午後4時45分～

開催場所：江別市役所内会議室

参加者：北海道中央児童相談所の職員 2名

議題：（1）子どもの権利擁護について

（2）子どもの権利を守るために必要な機能や支援について

（1）子どもの権利擁護について

【児童相談所①】

- ・児相には虐待を受けてくる子どもが多い。叩くなどはわかりやすいが、潜在的な虐待も多い。ネグレクトは意識せずにやっている人も多いのでは。
- ・保護すること自体も子どもの権利侵害になる。教育を受けることや自由に行動することができないということもあり、保護はなるべく短めにしている。
- ・今年の6月から、一時保護は保護者の同意が得られなければ、一時保護状を請求することになっている。その際は子どもにも一時保護についての説明をしっかり行うことになっている。子どもは保護されたくないなどの意見を述べるができる。ただ、必要であれば、「意見はわかるけど保護は必要」ということを説明して保護している。保護する際、持ち物や髪の色など、合理的な理由なくやめさせることはできない。例えば、携帯電話などは通信できてしまうので安全確保できないから預からせてもらうなど、理由をしっかりと説明することになっている。
- ・基本的には行動は自由だが、命に関わる行為や他人に被害が及ぶような行為は止めている。
- ・家に帰れない、施設に行く、里親の所に行くとなった場合も子どもの意見は聞く。（子どもが）反対したからと言ってそれに従うわけではなく、今何が必要かを説明して納得してもらう。
- ・施設に行った後、施設を変えなければならないとなった場合も意見を聞いている。また、入所期間が延長になる場合や措置が解除になる場合も確認している。

【児童相談所②】

- ・以前から処遇については子どもや親に聞くということはしていた。子どもの意思表示のための支援「アドボケイト制度」が令和6年から始まり、児相や施設の職員に話したくないことも、第三者に相談できるようになった。子どもの権利についての意識は高まってきている。
- ・保護処分は、子どもの意向を無視してできない。説明をするということはレベルが上がってきている。
- ・学習支援員が増えて、今は必ず配置されている。長期の保護になると、学習の機会が奪われてしまう。理想は教職員などの経験者が良い。
- ・虐待から守り、生きる権利、成長する権利を守らなければならないし、子どもの安全も当然守らなければならない。

【子育て支援課】

- ・例えば、虐待をする親だとしても自分にとっては親なので、保護されることを嫌がる子どももいるのではないかと。そういった声も聞きながら、それでも家に帰すわけにはいかないということで保護していると思う。子どもの声を聞くという部分と子どもを守るという部分の難しさがあると感じた。

【児童相談所②】

- ・子どもの声を聴くことはもちろん重要であるが、一時保護は、子どもの意見も含めて家庭裁判所が判断する。

【児童相談所①】

- ・保護してから7日以内に、親子関係が特定できるものを入手できなかつたり、同意を得られない時に家裁に一時保護状を請求する。請求時の資料に子どもの意見も入っている。「家に帰りたいです」ということもあり得る。
- ・虐待の場合は「帰りたくない」が多いが、子どもの問題行動で保護する場合は「帰りたい」が多い。
- ・各児相にいたが、保護所によってルールが違う。一度すべて白紙にして本当に必要なことだけにしていくべきという話はした。多すぎるルールは、子どもにも我々にも足かせになっていくので、お互いにとって良くないのでは。必要な制限だけ残して、それ以外はお願いという形にする。
- ・児相が関わるケース数は年々増えている。虐待の認識が深まっている。

【児童相談所②】

- ・出生数自体は減っているのに通告件数が増えているのは、いろいろな問題があるからだと思う。警察への通告も多い。虐待の連鎖もある。

【子育て支援課】

- ・子どもの権利条例を作っても、すぐに何かが変わるわけではないと思っているが、これまでの社会では、子どもを下に見ている部分があったと思う。子どもも1人の権利の主体として見られるような社会になれば、児相が関わるケースも減るのではないかと考える。

【児童相談所②】

- ・しつけとして叩くというような認識は今でもある。暴力を伴うしつけは禁止されたが、いまだに主張する保護者は多い。機会があれば、市民や子どもにも、暴力を伴うしつけは親の愛でも何でもないとPRしてほしい。

(2) 子どもの権利を守るために必要な機能や支援について

【児童相談所②】

- ・普及啓発は大事。すぐには変わらないかもしれないが、子どもが大人になったときに「やっぱりあれは変だよな」と思ってもらわないと、世の中は変わっていかないのでは。

【子育て支援課】

- ・行政がやることは周知や普及だけと思われがちだが一番大事なこと。全員に浸透しているかと言えばしていない。子どもの権利自体は、国が締結しているのですでに守られているが、ほとんどの人が知らない。まちで条例を作るとなるときに、子どもの権利を大人も子どもも知っていなければならないと思っている。知っていてやるのと知らないでやるのとでは全然違う。守れるか守れないかは次の段階。

【児童相談所②】

- ・子どもの権利に関する知識を持っていれば、いつか子ども自身が、「権利侵害されていた」と判断ができる時期が来るかもしれない。

【子育て支援課】

- ・条例を作ることはきっかけで、教育の現場などで子どもの権利についての話ができる機会を作ってもらえるかもしれない。子ども自身の気づきにもなる。
- ・子ども向けの条例と言われることも多いが、大人が知らなければならないことということも周知が必要と思っている。
- ・子どもの意見を聞くという意味では、子どもの意思確認やアドボケイト制度など、世の中全体でそういう方向に向かっていると思う。学習支援員の設置は、教育を受ける権利に基づいている。そういった考え方が進んでいることを把握できた。
- ・子どもそれぞれの自分らしさを制限せず、尊重する取組ができている現場。家庭、学校、会社、地域でもやっていかななくてはならない。
- ・アドボケイトのように、代弁してくれる人の存在は重要。子どもに直接聞くことだけが子どもの声を聞くということではないと感じた。

北海道南幌養護学校高等部のみなさんとの意見交換会

開催日時：令和7年10月10日（金）午前10時～

開催場所：北海道南幌養護学校

参加者：北海道南幌養護学校高等部 2名

- 議題：（1）江別市のここが好き
（2）どうしたら江別市がもっと住みやすいまちになるか
（3）みんなが望む卒業後の未来ってどんなもの？
（4）学校生活をもっと楽しく安心できる場所にするには
（5）みんなの「やりたい」を教える

（1）江別市のここが好き

【子育て支援課職員①】

- ・江別市は小麦が有名な町なので、パン屋さんがいっぱいあるところが好き。パンをいっぱい食べられて嬉しい。

【子育て支援課】

- ・江別市にはゆめちからテラスというのがあって、パン屋さんがある。幻の小麦と呼ばれているはるゆたかは、鉄腕DASHのハンバーガー作りに使われたりするくらい、江別市の小麦は日本全国で有名。
- ・江別市は大都市の札幌市の隣ではあるが、自然が豊かで落ち着いたまち。住んでいる人たちもみんな優しく、時間がゆっくり流れているようなところが好き。

【子育て支援課職員②】

- ・野菜直売所が多く、朝採れた野菜をそのまま買えて食べられるのが好き。休日は朝並んで買っている。

【生徒①】

- ・江別市の好きなところは、れんがや小麦の生産が盛んなところ。

【子育て支援課】

- ・赤レンガ道庁のれんがも江別で作られた。江別市だとEBRI（エブリ）や野幌駅で使われている。江別のれんがは北海道遺産にも選ばれている。小麦はパン作りに最適で、おいしいパン屋さんがたくさんある。おいしいパン作りをしたい人たちも、江別の小麦を求めて江別市で店を開いたりしてくれている。

【生徒②】

- ・江別市の緑が豊かなところ、歴史とともにまちが変わるところ、空気がきれいなところが好き。

【子育て支援課】

- ・江別市には野幌森林公園があり、原生林がそのまま残っている。日本の多くの森林は植樹によって作られている場所が多いが、野幌森林公園は昔からそのままの姿の森。シマエナガもいる。
- ・空気も綺麗で、自然が多く、都会過ぎないところが良い。

(2) どうしたら江別市がもっと住みやすいまちになるか

【生徒①】

- ・廃墟やパチンコ屋を減らしたら住みやすいまちになる。

【子育て支援課】

- ・廃墟については、江別市では空き家が多い。全国的にも高齢化が進んでおり、雪の多い江別市では、除雪の大変さから江別市から出て行ってしまっている人がいる。そこが空き家になっている。そこに若い人が住んでくれたり、新しいお店ができれば活気づく。

【生徒②】

- ・迷惑行為をなくす、事故を減らす、ゴミを分別する、違法駐車はやめる、ご近所トラブルをなくす。踏切で写真撮影をする人などのニュースを見て、やめた方がいいと思う。道路に捨てられているゴミをよく見かけるので分別した方がいい。

【子育て支援課】

- ・電車を撮影するために線路内に入ると、電車が止まり、たくさんの人に迷惑がかかる。ゴミについても、一人ひとりがゴミを捨てないということを意識すると、もっと住みやすいまちになる。



(3) みんなが望む卒業後の未来ってどんなもの？

【生徒①】

- ・仕事ができるようになって、お給料をたくさんもらえる社会人になること。

【子育て支援課】

- ・仕事をするのは、大変なことも多いが、楽しいと思うことも多い。市役所で働いて、特に子どもが笑顔になってくれたらすごく楽しい。

(4) 学校生活をもっと楽しく安心できる場所にするには

【生徒①】

- ・いじめや差別をなくす。

【子育て支援課】

- ・子どもの権利においても、誰もが平等という考えがとても大切。例えば、経済面や国籍、人種によって差別されないなど、自分らしく生きることがとても大切。

【生徒②】

- ・廊下は歩く、安全に気を付けて作業する、みんなで協力して授業に取り組む。

【子育て支援課】

- ・けがをしないように、「廊下は歩きましょう」という学校のルールができていると思うので、ルールが守られれば安全な場所になる。安全に気を付けて作業することも同じで、健康でいることやけがをしないということはとても大切。一人ではできないこともみんなで協力すれば大きなことをできたりもするし、協力したことによりいいものができあがり、仲間ができる。

(5) みんなの「やりたい」を教える

【子育て支援課①】

- ・今年の4月から今の仕事をしていて、まだまだ分からないことが多い。いろいろな人の話を聞いて、困っていることややりたいことを教えてもらって、かなえられるように、もっと頑張りたい。

【生徒①】

- ・江別市でやりたいことは、「いじめをやめよう」の看板を作ること。

【子育て支援課】

- ・看板を立てることによって、いじめはいけないことという意識が広がり、行動に移ると思うのでとても良い。
- ・看板は難しいが、ポスターを児童センターなどに貼ることは可能。ぜひ、作ってほしい。

【生徒②】

- ・自分で貯めたお金で欲しいものを買いたい。ケーキ専門の本。小学1年生の時に図書館で見た本で、お菓子づくりや料理に目覚めた。中学生になり、アレルギーに苦しんでいる人を見て、アレルギーのことを学び、アレルギー用のケーキを作れるようになりたいと思った。将来の夢は、パティシエになること。

【子育て支援課】

- ・アレルギーに苦しんで、食べたいものを食べられない子どもは結構いる。そういう子どもでも食べられるケーキをパティシエになって作ってほしい。その時は江別市でお店を出してほしい。